「御茶屋書留」から見た福岡藩御茶屋の類型化

福岡藩御茶屋に関する研究 (2)

TYPOLOGY OF O-CHAYAS IN FUKUOKA DOMAIN BASED ON "O-CHAYAKAKITOME"

A study on the o-chaya in Fukuoka domain Part 2

安高尚毅*, 宮本雅明**

Naoki ATAKA and Masaaki MIYAMOTO

The purpose of this study is to clarify typology of o-chaya in Fukuoka domain. This study is based on "o-chayakakitome" in Hayashi documents. In 1822, o-chayas were scattered about 13 places in Fukuoka domain. However, there were 19 o-chayas in genroku era. With the passing of the years, some o-chayas lost since genroku era. In 1822, the outside space and main building had many points in common. However, when this study pays attention to o-ima space and floor space, o-chayas divide into two types in edo era early days. One is A type without the bedroom. And, another is B type with the bedroom. Afterwards, C type of an amusement character was formed in the middle of Edo period.

Keywords : O-chaya, Fukuoka domain, Rest room, Bedroom, Amusement character

御茶屋、福岡藩、休息、宿泊、遊興

序

本研究は福岡藩御茶屋の空間構成を捉えるとともに、藩という枠組みの中で系統だてを行い、広範に及ぶ御茶屋の意味の一端を押さえ、福岡藩における御茶屋の成立と展開を把握することを目的としている。

前稿¹⁾では、福岡藩御茶屋の建築的特徴を明らかにするため、内野・赤間・山家御茶屋の共通点と相違点および外部と内部の关系到に着目し、考察を行った。その結果、絵図の残される福岡藩御茶屋は外部をも含めた空間が御玄関空間・御広間空間・御居間空間・詰所台所空間の4つの領域で形成されていたこと、平面形式に共通性が見られることを明らかにした。さらに、共通しつつも内野が詰所台所空間を充実させ、赤間が御広間空間を充実させ、山家が御居間空間・詰所台所空間を充実させ、場所の違いにより個性を持つことを明らかにした。

以上のような御茶屋の空間構成は3御茶屋のみなのか、または、絵図の残されない場所の御茶屋にも当てはまるのであろうか。本稿では、「御茶屋々々御茶坪数其外口々書留メ在役衆宅坪数共」^{注1)}

図1) (「御茶屋書留」と呼ぶ)を基本に考察を進める。「御茶屋書留」は藩全体を通した御茶屋の構成要素を捉えることが可能な史料で、文政5年(1822)の福岡藩に存在したすべての御茶屋の構成要素が

知られる。「御茶屋書留」の考察を行うことは、藩における御茶屋という存在を系統だてて捉えることができ、前稿の結果を活用することで、福岡藩御茶屋全体の実相を把握し、類型化を行うことができると考えられる。よって、以上のことを明らかにするため本稿では以下のような手順で考察を進める。

はじめに、福岡藩御茶屋の藩における状況を把握する。次に「御茶屋書留」を通して、外部の構成要素を把握し、福岡藩全体を通した御茶屋の外部構成要素の実相を明らかにする。さらに、主屋について「御茶屋書留」から知られる形式を把握し、文献史料と前稿の結果を参考に、主屋の規模内容の考察を行い、建設当初より変化していない御茶屋を抽出する。経年により変化している御茶屋については復元的に考察する。

以上のような過程で福岡藩御茶屋の類型化を試みたい。

1. 福岡藩御茶屋の変遷と「御茶屋書留」

御茶屋の所在をまとめて記すのが『筑前国続風土記』²⁾「御茶屋書留」「福岡藩民政誌略」³⁾である。

『筑前国続風土記』からは御茶屋が元禄期に箱崎・青柳・相島・赤間・底井野・黒崎・若松・植木・木屋瀬・赤地(直方)・飯塚・内野・姪浜・橋本(早良)・前原・板付・原田・山家・甘木の19箇所に設置され、

本稿は、『日本建築学会九州支部研究報告集(計画系)』(2005年)に発表した内容をもとに加筆・修正したものである。

* 島根大学総合理工学部材料プロセス工学科 助教・芸工修

** 九州大学大学院芸術工学研究院 教授・工博

Assistant Prof., Shimane University, M. Design

Prof., Faculty of Design, Kyushu University, Dr. Eng.

家臣所有の御茶屋が篠栗・大隈・志波・三奈木・武蔵・仙道の6箇所に設置されていたことが知られる。

「御茶屋書留」からは文政5年12月に雑餉隈・二日市・山家・内野・飯塚・木屋瀬・黒崎・底井野・赤間・青柳・箱崎・姪浜・前原の13箇所確認され、減少したことが知られる。

「福岡藩民政誌略」からは寛政年間から明治年間にかけて箱崎・青柳・赤間・黒崎・木屋瀬・飯塚・内野・山家・雑餉隈・前原・姪浜・底井野12箇所になったことが知られる。

以上より、藩政初期初期には藩内各所に御茶屋が設けられ、時代が下るにつれ、御茶屋の数が減少したことが知られよう。

ところで、「御茶屋書留」の記述内容は「内野御茶屋絵図」^{注2)}「赤間御茶屋御家通図」^{注3)}「山家御茶屋絵図」^{注4)}「箱崎御茶屋絵図」^{注5)}に見える御茶屋と建築内容が一致し、その内容にも信が置ける。記述内容は内部空間の記述はほとんどないが、外部空間の詳細を知ることができる。主屋・付属施設の規模、屋根材質、塀長さ、垣長さ、屋根の谷尾の別が把握される。これらすべての記述内容を主屋・表門・各種門・厩・圍繞装置・井戸・番所・駕籠部屋・倉庫類・雪隠・腰掛・外繫その他の項目をたて表にした(表1)。

また、年代に関しては文政5年以降の年号が見え^{注6)}、文政5年以降に改築・改修した際に加筆・修正されたところがある。

また、御茶屋の記載13箇所のうち雑餉隈については、民家を藩主に献上したという伝承が残されていること⁴⁾、他の御茶屋と比べ建築面積が著しく小さいことから、今回の検討からは除いている。

2. 福岡藩御茶屋の外部空間

まずはじめに主屋を除く御茶屋付属施設の構成に注目したい。前稿では3御茶屋の外部空間は付属施設に共通性が見られた。これらの結果を福岡藩全体に広げられるのであろうか。表1からは共通性があるものとそうでないものとに大別されることが読み取れる。全ての御茶屋に設けられる付属施設は表門・各種門・厩・圍繞装置である。少数の例外がある付属施設は井戸・番所・駕籠部屋・倉庫類である。設けるものと設けないものとに2分される共通しない付属施設は外繫・雪隠・腰掛・その他である。以下、福岡藩御茶屋の基本構成要素を導き出すため詳細に検討を行う。

2-1. 共通する付属施設

表門は全てに設けられる。瓦葺きを基本とする。ただし、姪浜・底井野は「御門」と記載された前後に付属屋の記述が見え、茅葺きの長屋門であった。

各種門も全てに設けられ、敷地境界に設けられるものと敷地を区画する塀に設けられるものとに大別される。

敷地境界に設けられる門で、表側に位置すると考えられる「御台所御門」「御成御門」は瓦葺きとし、裏側に設けられる裏門は茅葺きを基本とする。この他、勝手や木戸が散見される。赤間は御台所御門を茅葺きとするが、高台に位置し、表門との登り口が違い、通りに面しないからであろう。また、黒崎・青柳に御成御門・御出野御門が見える。

敷地を区画する塀に設けられるものは中門・路次と表記され、青柳以外全てに設けられる。その他、路次に、姪浜は「木戸路次」、底井野は「竹戸路次」が見える。

厩も全てに設けられる。全て茅葺きとし、梁間を2.5間とするも

のが多い。

圍繞装置も全てに設けられる。全ての御茶屋で赤間・内野・山家と同じような長さを呈することから^{注7)}、敷地を分割・圍繞していったと考えられる。圍繞装置は塀、垣に大別される。塀は練塀・駕籠塀を基本とする。練塀・駕籠塀に加え板塀を使用する御茶屋もある。底井野・箱崎は駕籠塀の長さが長く、駕籠塀を多用したようだ。垣は人工の垣と生垣がある。ただし、二日市は垣を使用しない。人工の垣を設けているところは赤間・内野・飯塚・底井野・青柳・箱崎で、その中でも装飾的と考えられる垣を用いるのは、飯塚・青柳・箱崎である。

以上、表門・各種門・厩・圍繞装置は福岡藩御茶屋の基本構成要素といえよう。

2-2. 例外のある付属施設

井戸は内野以外全てに設けられる。

番所は二日市・姪浜以外全てに設けられる。3箇所設け、表番所を瓦葺き、裏番所を茅葺きとするのが基本であったようだ。飯塚には御寝所番が設置されていたことが知られる。

駕籠部屋は赤間・前原・青柳以外全てに設けられる。茅葺きを基本としたようだ。「赤間御茶屋御家通図」には駕籠部屋が存在し、「御茶屋書留」の記述と矛盾する^{注8)}。他の2御茶屋にも駕籠部屋がなかったとは考えづらく、前原・青柳は敷地外にあったのかもしれない。

倉庫類は倉と小屋がある。二日市・底井野以外全てに設けられる。倉は「御倉」と表記するものは瓦葺きとする。小屋は茅葺きを基本とする。

以上、井戸・番所・駕籠部屋・倉庫類も福岡藩御茶屋の基本構成要素といえよう。

2-3. 共通しない付属施設

雪隠は12箇所中8箇所に設けられていた。下雪隠は茅葺きとするものが多い。前原は「風呂場」を、飯塚は「湯殿」を雪隠と同じ棟に設けていたようだ。

腰掛は12箇所中7箇所に設けられていた。瓦葺きとするものが多い。前原・山家・青柳は2箇所設ける。

外繫は飯塚・木屋瀬・山家・青柳・底井野・箱崎に見られる。

その他の項は、主に造園に関する事項を記載し、赤間・前原・内野・飯塚・山家・底井野に記載される。

雪隠・腰掛は設けるものと設けないものとに分けられるものの、建築仕様は共通性が認められ、外繫は上屋面積の大きなものに設けられ、小さなものには設けられないことが知られる。

2-4. 外部空間の共通性

以上、福岡藩御茶屋は表門・各種門・厩・井戸・池・圍繞装置、番所・駕籠部屋・倉庫類を基本構成要素としていたといえる。雪隠、腰掛は設けるものが多く、外繫は上屋面積の大きなものに設けられた。以上よりいくつかの例外はあるものの、共通した付属施設をそろえ、付属施設の規模・屋根材料が共通することから、福岡藩御茶屋の基本構成の存在が確認される。

前稿で赤間・内野・山家御茶屋が閉鎖的な構えを呈し、敷地中央に主屋を構え、主屋中央に中庭を取り、敷地の中を塀や垣により大きく4つのゾーン分け、内部と外部が一体的に捉えられ、御玄関空間・御広間空間・御居間空間・詰所台所空間の4つに区分できるこ

[illegible]

とが導き出された。「御茶屋書留」からは外部空間に共通性が窺われ、特に各種門、敷地を囲う以上の長さと考えられる圍繞装置がすべての御茶屋に設けられていることから、赤間・内野・山家以外の御茶屋も4つの異なる領域を用意していた可能性が考えられよう。

よって、福岡藩御茶屋は以下のような建築構成を呈していたと推測されるのである。

御玄関空間には表門、腰掛、御駕籠部屋、番所、路次、厩を配する。表門は瓦葺きを基本とし、番所も瓦葺きを基本とする。厩は詰所台所空間に配される場合もある。

御広間空間は練塀途中に配される路次等により御玄関空間から繋がれ、駕籠塀、板塀、生垣によって圍繞される。

御居間空間は練塀で厳重に圍繞され、路次によって御広間空間、詰所台所空間に繋がれる。飯塚の御寝所番はここに設置されたと推察される。

詰所台所空間には裏門、番所、倉、厩・外繋、雪隠、小屋、井戸を配する。裏門は茅葺きを基本とし、裏門が御台所御門と兼ねている場合もあり、その場合は瓦葺きを基本とする。番所は敷地外部との出入口、御居間空間に繋がる路次付近に配され、茅葺きを基本とする。

以上、福岡藩御茶屋の外部空間は共通性が窺われる。

3. 福岡藩御茶屋の主屋

3-1. 文政5年の主屋規模

外部空間は共通性があることが把握されたが、主屋にも共通性が見出せるのであろうか。「御茶屋書留」から知られる主屋の情報は、屋根形式、面積である。

屋根形式は上屋・下屋の材料と上屋屋根形状を知ることができる。上屋はすべて茅葺きとし、棟の長さ・谷尾の数が記されるので、平面絵図が残された内野・山家・箱崎の御茶屋については、全体の屋根形状を復原することができる。後に改変された影響が^{注9)}、赤間・前原は棟の長さ・谷尾の数を記載せず、赤間は平面絵図が残されるが、屋根形状を復原できない。実際にこれら谷尾の数、棟の長さを考慮しながら内野・山家・箱崎御茶屋の屋根形状を復原すると、一部、切妻にせざるを得ない部分が生じるものの、基本的に寄棟造となる^{注10)}。また、ほとんどの御茶屋で谷の数より尾の数が勝ること、外観を描いた底井野^{注11)}と山家^{注12)}の絵図が基本的に寄棟^{注13)}で表現されていること、福岡藩における上層民家が茅葺きの場合、寄棟とすることから、福岡藩御茶屋の屋根形状は基本的に茅葺き寄棟造であったと考えられる。数値が大きいほど入り組んだ屋根形状を呈し、小さいほど単純な形状と考えられる。これにともない前者が不整形、後者が整形の平面形状であったことが予測される。

下屋はすべて瓦葺きとする。「御茶屋書留」と絵図面から^{注14)}は下屋下に縁側や小部屋を収めることが知られ^{注15)}、上屋に基本諸室を収めたことが知られる。下屋は敷地や諸部屋の配置計画上の整合性をとるために設けられたのであろう。よって、後述する面積検討は上屋面積を対象とする。

主屋は上屋・下屋・合計面積が記される。上屋面積最小のものは二日市の95坪で、合計面積最小のものは赤間と二日市の124.5坪である。箱崎は上屋・合計面積ともに最大で154.75坪・169坪である。箱崎は主屋の他に20.25坪の「御亭」が設けられていたことも知ら

れる。

以上より、福岡藩御茶屋は面積を124.5坪以上とする大規模な建築で、建築仕様に共通性が窺われ、すべての御茶屋が瓦葺きの下屋を巡らせ、主屋は茅葺き寄棟造であったと考えられ、福岡藩御茶屋の主屋も基本形式が存在したと考えられよう。

3-2. 主屋規模の変化・縮小

本稿の目的である類型化は、言い換えれば計画当初の理念を追究することである。御茶屋の建設は藩政期初期に集中し^{注16)}、その後の社会的変化により改造、改築がなされたと考えられ、復元的考察が必要となる。ここでは文献史料から把握される御茶屋の経年変化を追ってみたい。

文献史料より経年変化の把握される御茶屋が二日市・赤間・前原・飯塚・底井野・箱崎である。

二日市は「御茶屋書留」に「御臺屋土間半分解除＝相成ル」と記され、台所が縮小されたことが知られる。

赤間は「御茶屋書留」から「古ヨリ四拾六坪半程減」とあり、もとは171坪で最大であったことが知られる。

前原は面積縮小の記述はみられないが、「御茶屋書留」に「嘉永元年申秋御建物新図」とあること、『林文書目録』^{注17)}の前原御茶屋の史料の中に「御出野御門」「御寝所番所」の史料が残されること、嘉永元年の記述にはこれら施設が見られないことから主屋が縮小されたと考えられる。

飯塚は「里諺抄」⁵⁾から寛政8年(1796)に建て替えられ、底井野御茶屋を解除した材を補足用材として使用されたことが知られる。

底井野は「里諺抄」から底井野が寛政8年(1796)解除され、「綜合福岡藩年表」⁶⁾からは底井野が文化9年(1812)に再建されたことが知られる。また、「御茶屋書留」からは年代は記されないが「少し御解除＝成ル」とあり、面積の縮小が知られる。

箱崎は『筑前国続風土記拾遺』⁷⁾から享保19年(1734)に御茶屋が類焼し、移建したことが知られる。

以上より、二日市・赤間・前原は縮小されたことが知られ、建て替えられたのが飯塚・底井野・箱崎で、特に底井野と箱崎は時間を隔てた再建と移建ということが知られた。

3-3. 縮小した御茶屋の復元的考察

経年により変化した御茶屋の中で具体的に復元考察できるのが赤間と前原である。

前稿の赤間御茶屋読取平面図からは配置および平面に不自然な箇所が見られ、その意味を考察することで縮小部分が推測できる。不自然な箇所は「御泉水」が御居間空間を囲む練塀の外側の敷地北に離れて存在すること、御居間空間周辺の山茶花垣、矢来、練塀の配置関係が不整合であることである。御泉水は庭園に設けられる池であるから、かつては御泉水周辺には庭が広がり、それに面して御居間が配置され、それを取り囲む圍繞装置が存在したと考えられる。また、御広間の平面形式も他の御茶屋と比べ敷込縁や床の間がなく、御玄関空間との繋がりも12畳の部屋を鍵型に介し、機能的にも使いつらく、御広間空間、御居間空間周辺が改変されたと考えられる。また、縮小される以前は福岡藩で最大であり、縮小されてからは最小の二日市と総面積が一致するので、必要最低限の機能を残し縮小されたと考えられる。前稿において知られるように赤間と内野・山

家御茶屋の差が、御料理所・御寝所・惣詰等であることから、御料理所・御寝所・惣詰等が取り除かれ、もしくは縮小されたのであろう。赤間は御料理所や惣詰に当たる空間は存在するので、御寝所の有無が大きく異なるといえる。御居間が御寝所を兼ねることができる⁸⁾ので、できるだけ必要最低限をめざし、余分なものを取り除いたのであろう。

一方、御寝所番所と御出野御門が嘉永元年以前に存在した前原は嘉永元年（1848）には付属施設が消滅していることから主屋が縮小されたと考えられる。こちらも以前は御寝所があり、縮小されてからは御寝所を取り除いたと考えられよう。

以上より、縮小される以前には赤間・前原御茶屋は御寝所を中心とする宿泊空間を用意していたことが把握されよう。また、二日市・赤間・前原は前述の御茶屋数の減少と考えあわせると維持の関係から床面積が縮小されたと考えられる。

4. 福岡藩御茶屋の類型化

建設当初から変化がないと考えられる御茶屋は姪浜、内野、黒崎、木屋瀬、山家、青柳である。これらの面積は上屋面積が104.75～136.75坪でその差は32坪である。この主屋の面積の差を考察することが類型化へと繋がる。この中で平面の把握される内野・山家御茶屋の差は御寝所の有無であったことが前稿で判明している。山家御茶屋の御寝所関係面積は12.75坪である。32坪の差は御寝所関係面積とそれに付随するサービス空間を考え合わせれば辻褄が合う。

赤間・前原御茶屋の復元考察より宿泊空間が消滅したことで以上の面積検討から、宿泊空間の存在が鍵であることが把握されよう。よって、宿泊空間の有無で類型化を試みしてみる。ただし、宿泊空間は前稿で指摘した4空間の中の御居間空間の中に存在し、空間類型としては二次的な空間類型であることを付け加えておく。

宿泊空間の有無の面積はどのあたりを境とするのであろうか。文政5年時の福岡藩御茶屋は上屋124坪の飯塚に御寝所番が見られること、内野には御寝所が無いことから、建設当初、姪浜、内野、黒崎は宿泊空間が無く、木屋瀬、山家、青柳は宿泊空間があったと考えられる。

また、宿泊空間の有無の面積の境と考えられる黒崎以下と飯塚以上では、黒崎の面積以下の御茶屋に外繋が無いのに対し、飯塚の面

積以上の御茶屋には既と外繋の両方を用意しているのに気付く。つまり、多くの馬を御茶屋敷地内に収容できるということである。宿泊空間の無い御茶屋を休息用、宿泊空間のある御茶屋を宿泊用と考ええると、宿泊ということで、馬を収容する場所を確保していたと考えられる。

御茶屋の利用形態は次稿以降で詳述するが^{注18)}、ここで、宿泊空間の有るとしたものと無いとしたものの使われ方を『新訂黒田家譜』⁹⁾で大掴みすると、宿泊空間の有るとしたものは宿泊日数が多い傾向が窺え、面積の大小から導き出された宿泊空間の有無は妥当と考えられる。

以上より、宿泊空間の有無により分類が可能と考えられるが、利用形態の詳細な考察を経ていないためここでは面積の値が比較的小さく宿泊空間が無いと目されるものをA型と呼び、面積の値が比較的大きく宿泊空間があると目されるものをB型と呼ぶこととする。

ところで、残りの建設当初の面積が把握されない二日市・飯塚・底井野・箱崎はどのように位置付けられるのであろうか。

二日市は「御茶屋書留」から台所が縮小されたことが知られるものの、その他の文献史料には改変の記事は無く、建設当初と面積に大きな変化は無いと考える。よって、宿泊空間を用意していなかったと考える。

飯塚は寛政8年（1796）に建て替えられるが¹⁰⁾、経年により縮小されることを鑑みると、建設当初より御寝所を備えていたと考えてよいであろう。

底井野は前述のように寛政8年（1796）解除され、文化9年（1812）に再開されるので¹¹⁾、建設当初の主屋の規模はわからない。ただし、底井野は遊獵場であることが知られ¹²⁾、文政5年時に他の御茶屋には備えない竹戸路次や、番所に竹瓦を用いたり、付属施設の意匠に所々数寄屋風意匠が垣間見え、遊興の性格が窺われる。

箱崎は移建される前の主屋規模はわからない¹³⁾。ただし、享保19年（1734）に移建されてからは御亭が設けられ、垣には装飾性に富む菱垣が使用されることから遊興的側面が窺える。

よって、建設当初、二日市はA型、飯塚はB型であったと考えられる。底井野・箱崎は建設当初の姿は分からず、文政5年以降は遊興の性格が窺われる。これをC型と類別したい。

以上、「御茶屋書留」に記述される御茶屋は、建設当初、宿泊空間が無いと目される二日市・姪浜・内野・黒崎のA型、宿泊空間が

表2. 福岡藩御茶屋類型化一覧表

		経年変化の有無	復元根拠	建設当初の上屋面積	宿泊空間の有無	文政5年時の外繋
A型	二日市	あり	基本的に変化なし	95坪	なしと判断	なし
	姪浜	なし	基本的に変化なし	104.5坪	なしと判断	なし
	内野	なし	基本的に変化なし	119坪	なし	なし
	黒崎	なし	基本的に変化なし	119.5坪	なしと判断	なし
B型	赤間	あり	御茶屋書留による	総面積が171坪	ありと判断	なし
	前原	あり	林文書目録による	不明	あり	なし
	飯塚	あり	基本的に変化なしと判断	不明	あり	あり
	木屋瀬	なし	基本的に変化なし	130坪	ありと判断	あり
	山家	なし	基本的に変化なし	134.5坪	あり	あり
	青柳	なし	基本的に変化なし	136.75坪	ありと判断	あり
C型	底井野	あり	再建	143.25坪	文政5年以降ありと判断	あり
	箱崎	あり	移建	154.75坪	文政5年以降あり	あり

有ると目される飯塚・木屋瀬・山家・青柳のB型、建設当初の状態が把握できず、遊興的側面が窺え、他の御茶屋と比して面積の値が大きい底井野・箱崎のC型とに分類が可能であろう。以上を表2としてまとめた。

小結

以上、福岡藩御茶屋は124.5坪以上の大規模な建築で、場所により特徴を備えるものの、前稿の平面形式が共通するという結果、本稿の外部空間構成が共通すること、主屋が瓦葺きの下屋を巡らし、上屋を基本的に茅葺き寄棟造と考えられることとを照合すると、福岡藩御茶屋の建築形式は共通していると考えられ、4つの異なる領域を用意していた蓋然性は極めて高いといえよう。

また、御茶屋数の減少と床面積の縮小を考え合わせると維持の関係から、年代が下るにつれて必要最低限の御茶屋を残し、諸室も最低限の部屋を残したと考えられることを指摘した。

さらに、福岡藩御茶屋は基本構成が存在しつつも、面積の検討と御居間空間という一部分に注目することで、建設当初にA型とB型の2類型に分類でき、二日市・姪浜・内野・黒崎は宿泊空間が無いと目され、赤間・前原・飯塚・木屋瀬・山家・青柳が宿泊空間があると目された。底井野・箱崎は建設当初の姿は分からず、藩政期中期に建て替えられた後、遊興的性格が窺われC型と類別した。

遊興的性格の窺われる底井野・箱崎に関しては公的御茶屋と位置付けられるものの、遊樂場であることや御亭を設けるなど私的性格を有することから、次稿、その使われ方と空間的特徴を詳しく考察したい。

また、建設当初、藩内各地に所在した御茶屋にこれら2つの類型がちりばめられたことは、そこに福岡藩御茶屋の建築構想が窺われるのである。よって、次稿以降、利用形態の把握からA型、B型の性格付けと、建築構想がいかなるものであったのかという御茶屋配置計画を検討したい。

謝辞

「御茶屋書留」を読み下すにあたり、横田武子氏の指導を得た。ここに記し謝意を表したい。

注

注1) 「御茶屋々々御家坪数其外口々書留メ在役家役宅坪数共」(文政5年、『林文書』福岡県地域史研究所蔵)、以下、例として二日市の項を紹介するとともに書き下しを記す。

注2) 「内野御茶屋絵図」(文化8年、安田家久家蔵)

注3) 「赤間御茶屋御家通図」(『林文書』天保5年、福岡県地域史研究所蔵)

注4) 「山家御茶屋絵図」(『三奈木黒田家文書』享和元年、九州文化史研究所蔵)

注5) 「箱崎御茶屋絵図」(鹿児島歴史資料センター黎明館蔵)

注6) 表紙には文政5年12月と記されるものの、二日市御茶屋の項で安政2年(1855)、赤間御茶屋の項で天保5年(1834)、前原御茶屋の項で嘉永元年(1848)、前原町茶屋の項で天保7年(1836)、原田御代官役宅の項で文政11年(1828)が記載され、加筆修正されている。

注7) 前稿において赤間・内野・山家御茶屋が廻廊装置により4つの空間に分割されていることを指摘している。

注8) 赤間御茶屋は縮小に伴い改造されたと考えられ、赤間の井戸の項にも見られるように後に整備が行われていることが知られる。このことから整備途中の状況が「御茶屋書留」に記されると考えられる。

注9) 注6に同じ。

注10) 谷尾の数と棟の長さの関係をここで述べておくと、谷尾の数は直屋寄棟では谷が0尾が4となる。L字屋寄棟では谷が1尾が5となる。T字屋寄棟では谷が2尾が6となる。一部切妻にすると谷が2尾が4となる。コの字屋寄棟では谷が4尾が4となる。また棟の長さは切妻・入母屋にすれば長くなり寄棟にすれば短くなる。このような基本的事柄を踏まえて内野・山家・箱崎は復原を行った。内野については谷尾の数は合致したが棟の長さが長くなった。山家・箱崎は問題なく復原ができ、端部を寄棟とすることが把握された。また、端部を入母屋で内野・山家・箱崎で考察すると棟の長さが記述内容よりもかなり長くなりここで寄棟であることが導かれる。

注11) 「黒田藩主宿館之図」(月之瀬八幡宮蔵)

注12) 「筑前名所図会」(文献出版、1985)

注13) 「黒田藩主宿館之図」からは式台玄関上部を入母屋、「筑前名所図会」は信憑性に若干欠けるものの、式台玄関上部を瓦葺きの切妻とし、その他を寄棟で表現している。

注14) 「内野御茶屋絵図」(注2)「赤間御茶屋御家通図」(注3)「山家御茶屋絵図」(注4)「箱崎御茶屋絵図」(注5)の4図面を指す。

注15) 「御茶屋書留」から、二日市は「御間軒」を、内野は「上中雪隠」を、山家は「御敷込廊下」「御手水所」「中通り雪隠」を下屋下に収めたことが知られる。また、「内野御茶屋絵図」「赤間御茶屋御家通図」「山家御茶屋絵図」より下屋下に内野は小使所、水屋、次湯殿、御間軒、縁側、雪隠を、赤間は御内証玄関、御水屋、御台所の一部、御居間の床の間、敷込縁、縁側を、山家は御敷込廊下、御手水所、縁側および雪隠を収めたことが知られる。

注16) 参考文献2、元禄期に19ヶ所見ることによる。

注17) 『林文書目録』(天保5年、福岡県地域史研究所蔵)

注18) 本稿では「御茶屋書留」から知られる情報を中心に論文を組み立てている。紙幅の関係もあり、利用形態については次稿以降で詳述する。

参考文献

- 1) 拙稿「御茶屋絵図からみた福岡藩御茶屋の空間・意匠構成」(『日本建築学会計画系論文集 No. 603』, p156～p160, 2006. 5)。以下、前稿といえはこの文献を指す。
- 2) 貝原益軒; 伊東尾四郎校訂『筑前国続風土記』(文献出版、p30, 1977)
- 3) 伊東尾四郎編「福岡藩民政略」(『福岡県史資料第一輯』名著出版、p397, 1972)
- 4) 赤司岩雄『大野城市巡礼記』(コロニー印刷、p229, 2002)
- 5) 能美安男校訂「里諺抄」(『八幡市文化財調査報告第七輯』八幡市教育委員会、p11, 1962)
- 6) 伊東尾四郎編「福岡藩年表」(『福岡県史資料第二輯』名著出版、p229, 1972)
- 7) 青柳種信編著; 福岡古文書を読む会校訂『筑前国続風土記拾遺(下)』(文献出版、p16～17, 1993)
- 8) 平井聖『日本住宅の歴史』(日本放送出版協会、p160, 1974)
- 9) 福岡古文書を読む会校訂『新訂黒田家譜第2巻―第6巻』(文献出版、1982～1987)
- 10) 能美安男校訂「里諺抄」(『八幡市文化財調査報告第七輯』八幡市教育委員会、p11, 1962)
- 11) 伊東尾四郎編「綜合福岡藩年表」(『福岡県史資料第二輯』名著出版、p229, 1972)
- 12) 能美安男校訂「里諺抄」(『八幡市文化財調査報告第七輯』八幡市教育委員会、p8, 1962)
- 13) 青柳種信編著; 福岡古文書を読む会校訂『筑前国続風土記拾遺(下)』(文献出版、p16～17, 1993)

(2007年3月9日原稿受理, 2007年8月8日採用決定)